

荒又美陽著

『パリ神話と都市景観』

——マレ保全地区における浄化と排除の論理——

長井伸仁

都市には種々の表象がついてまわる。都市が非都市地域との対比でもつもの、ある都市を他都市と比べた際に浮かび上がってくるもの、さらには都市内部の個々の地区が有するもの。それら表象には何らかの実体が対応するとして、両者の関係は「まず実体があり、それにもとづき表象が形成される」という一方向とは限らない。メディアが高度に発達した今日、都市や都市内地区のイメージが過度に増幅され、それが都市社会を方向づけている例は、頻繁に見受けられる。同様の事例は過去にも存在した。否、双方向的なメディアが未発達だったからこそ、ひとたび形成された表象は固定化されて影響力を発揮しつづけたのかもしれない。

本書は、パリの中心からやや東寄りに位置するマレ地区を事例に、地区で実施された都市計画事業を、地区の表象との関連において分析する。マレはパリ有数の観光スポットであるが、一般には、古い街並みに貴族の邸宅が散在するというイメージで捉えられている。だが、街並みや邸宅が現在まで途切れなく保存されてきたわけではない。社会的に不均質で、歴史を通して多層的に形成されてきた地区に、二〇世紀の後半、上記イメージに適合する

点を強調する方向で都市計画事業が遂行された。イメージに沿って地区が造りかえられたといっても過言ではない。

都市計画事業は地区の性格を明確にし、結果として今日のマレがある。そのため、マレの都市計画は「ヨーロッパらしい都市再生の試みとして知られ、おおむね成功事例と見られている」（九頁、以下、括弧内の数字は本書の頁）。だが、地区が有していた多様な性格のなかで、いかにして特定の部分が強調されるにいたったのか。また、それによって捨象される側面や排除される人びとがいたのではないか。本書は、副題が示唆するように、これらの点に注目した研究である。

本書の構成は以下の通りである。

序 パリ神話と都市景観

I 歴史主義と衛生主義の相克

II 「保全地区」マレの成立

III 神話に基づいた景観の形成

序では、都市をめぐる表象と都市認識のあり方が扱われる。都市は、多くの住民を抱えているため、ときに複数の顔を見せるが、そのなかで特定のものクロウズアップされ、都市全体のイメージと化して流布することがある。フランス語ではこの種のイメージは「神話」とよばれる。パリにも貧困や暴力などの神話がつきまとってきたが、マレ地区のばあい、貴族が好んで邸宅を構えていた地区というイメージが強く、これが地区で実施された都市計画に影響する。

Iでは、二〇世紀半ばに至るマレ地区の歴史が辿られ、そのなかで、地区をめぐるいかなる表象が形成されたのが示される。

マレには一六世紀中頃から貴族が住むようになったが、彼らは「共同住宅での生活から共同体意識をはぐくんだ」都市民とは対照的に、「邸宅の外に関する関心は薄く、マレ地区内で共同体を形成していたのではなかった」(四四)。地区に根づかない貴族たちは、一八世紀になるとセーヌ左岸のフォーブル・サン・ジェルマン地区に移り住む。彼らが去った邸宅や建物は、区画が細分化され建て増しがおこなわれて、「中小商工業者や労働者の作業場や居所となっていくた」(四六)。このように、一八世紀から一九世紀にかけて、マレ地区のイメージは「貴族の街区から民衆の街区へ」(四八)と転換したのである。

パリは一九世紀に入ると急激な人口増を経験する。都市は外へと膨張をつづけるが、旧市街の過密さと不衛生さも深刻になり、大規模な都市計画事業が不可避になった。七月王政期、知事ランビュトーのもとでおこなわれた事業につづき、第二帝政期のいわゆるオスマンのパリ改造によって、パリは今日の様相をもつようになった。だが、マレ地区はこれら事業の影響をほとんど受けず、一八世紀までの姿をとどめていた。このことがマレの運命を決定づける。一九世紀の都市計画事業はおもに衛生の観点からおこなわれたが、歴史性保護の観点もしだいに取り入れられる。マレが本格的な都市計画の対象になるのは二〇世紀になってからであり、この「遅れ」によって、マレは歴史性を考慮した都市計画を享受できたのである。

この方向が明確になったのは第二次大戦中のヴィシー政権期のことであった。マレ地区については二〇世紀初頭から大規模な再開発計画が検討されていたが、一九四二年に当初の計画は撤回さ

れ、代わって地区の歴史性を保存する計画に変更された。「マレ地区の不衛生区画は、解体されるのではなく、歴史的であるとして保護の対象となったのである」(六〇)。Ⅱで詳述されるように、一九六四年にマレは国家により保全地区に指定されるが、それはこの新たな計画の延長上にあつたともいえる。

以上のようなマレ地区の変遷に対して、そのイメージがどのようなものであつたかを、筆者は革命前後のレチフ・ド・ラ・ブルトンヌからバルザックを経て二〇世紀のジョージ・オーウェルに至るまで、いくつかの文学作品から読み取る。そこでは、「マレが民衆的な地区であることが了解されながらも、建造物の『貴族性』がときには現実を規定する、あるいは凌駕する力を持つものとして捉えられている」(七〇)。筆者はまた、一九〇二年に発足した四区歴史考古学研究協会(通称「ラ・シテ」)を取りあげる。協会は、マレ地区の南半分を含むパリ第四区に居住する「上層市民層」(七三)が集まった組織であつた。会報では貴族の邸宅がしばしば取りあげられ、サロンや教育機関など地区の知的な面に光が当てられていた。「ラ・シテ」に集う碩学や専門家たちは、文学作品を通じて形成されていた「貴族の街区」というイメージにお墨付きを与えたのである。

しかし、現実のマレは「民衆の街区」であつた。一九世紀末からは、東ヨーロッパでの迫害を逃れてきたユダヤ人が定住し、制帽業を中心に労働者や職人として生計を立てていた。このような現実に対し、「ラ・シテ」は冷淡なまなざしを投じ、ユダヤ人を「狂信的」(八九)や「外国人住民のくず」(九一)などと形容する。歴史協会の活動は「地区を歴史的街区とする視線を作り上げ

ると同時に、その場にふさわしくない人々の『退場』を期待し、さらには要求する基盤を作っていた」(九二)のである。

先に述べたように、マレ地区の都市計画が再開発から保存へと方向転換したのは第二次大戦中のことであつた。一方この時期には、親ドイツ的なヴェイシー政権のもと、マレ地区に根づいていたユダヤ人たちの多くが街を追われ、収容所へと移送されていった。二つの出来事は偶然に同じ時期に起きたのか、それとも互いに関連しているのか。別の言い方をすれば、『保存は『不純物』を一掃して地区の歴史性のみを残せるときに実現に向かったと考える』(九七)のではないか。この点について、筆者は慎重な姿勢をみせつつも、『都市計画事業と移民たちの排除が分かちがたく結びついていたことは否定しきれない』(九九)と述べる。

Ⅱは、第二次大戦後にマレが保全地区に指定される過程を辿る。Ⅰで確認されたように、地区内の不衛生区画については、大規模な再開発から歴史性を保持した都市計画へと方針が変更されたが、第二次大戦が終わってまもなく、パリで開催された『都市計画・住居国際博覧会』にマレの都市計画事業が出展された。その際、事業の特徴とされたのは搔爬的撤去とよばれる手法で、道路に面したファサード部分を残しつつ、異物を掻き出すかのように建物内部を取り壊すことで衛生状態を向上させるものであつた。この手法は「取り壊しから修復へ」という都市計画理念の転換を示しているが、搔爬という「露骨な表現には、活かそうとする建造物とそうではない建造物への冷徹な視線が表れている」(一一四)と筆者は指摘する。

当局であるセーヌ県は、建築家アルベール・ラプラドを中心に

据え計画を実行に移そうとしていた。ラプラドは植民地モロッコでの都市計画に深く関わり、それを通じて土着性をひとつの軸にした都市計画を理想としていた人物である。マレ地区の場合、土着性を表わすとされたのが「貴族の街区」としての側面であつた。ラプラドは一八世紀の古地図を参考に、衛生状態を改善させ、工業の域外移転を進めながら、マレに昔日の姿を取り戻そうとした。「地区の神話は、こうして、計画者の図面上で具体的な姿を取り始めたのである」(一二三)。

ラプラドが作業を進めていた一九六三年、マレ地区の事業に国家が関与をはじめた。翌六四年、地区は国家によって保全地区に指定される。セーヌ県がそれまで実施してきた事業は国家によって引き継がれ、国家と県が連携しつつ地区の整備計画を策定してゆく。もつとも、計画は順調には進まなかつた。保全地区に指定されたところでは「保全活用恒久計画(P.P.S.M.V)」を立てることが法律で定められていたが、マレ地区の場合、計画が承認されたのは指定から三〇年以上も過ぎた一九九六年のことであつた。激しい議論や大規模な反対運動もなくはじまつた計画は、「国内の情勢の変化を受け、迷走することになる」(一二二)。

Ⅲでは、事業に対する批判と事業の再検討の様子が明らかにされる。保全地区指定後に実行された事業として、マレ中心部の「実践地区」と、同南部の「ジャルダン・サン・ポール地区」の二事例が取りあげられる。前者は、騒音の出る産業を域外に移し、あわせて住民の三分の一を転居させる計画であつたが、建設した住宅の販売が不調で、事業を委託された会社は破綻した。後者では、移転の対象となつた住民には他地区の家賃を払えない人が少

なからず出た。このようななか、保全活用恒久計画は再検討に付され、地区の経済活動や生活実態をも考慮に入れる方向で見直された。それでも、事業はマレの地域社会に大きく影響し、地区の社会経済的な性格を変えてゆく。筆者はいくつかの公式統計を資料に、労働者が減る一方で管理職が顕著に増えたこと、学歴の点でも地区住民はバリの平均よりも高学歴であったことなどを明らかにしている。

六〇年代末以降、歴史性に惹かれるようにして、マレにはギャラリー、古美術館、服飾店などが立ち並ぶようになった。形成されてきた神話はたしかに現実に影響を及ぼしている。「地区のボジティブな神話に現実のほうを追いつく形で、建造物や人口が調整され、住民の教育水準や経済状態にも影響が現れた。一九六〇年代までは理想として計画者の頭にしかなかったものが、多くの人々に共有されることによって実現したのである」(一八)。

今日のマレでは、ユダヤ系、ホモセクシユアル、中国系など、新たな集団が目立ち、地区のイメージにおいても不可欠に近い存在になっている。かつて神話で強調されたマレの歴史性は、マレの一面にすぎなくなった。もともと、新たな集団も「マレ」という地名を積極的に用いており、表象としてのマレの価値は減じてはいない。だが、表象を強調することは新たな選別や排除につながりかねない。筆者は、ホモセクシユアルの人びとが白人男性に限定されていることなど、若干の事例を示しつつ、警鐘を鳴らす。「いったん成立した神話は、適合しない要素を巧妙に排除する。マレ地区は、神話によって不穏なものを洗い落とされ、『浄化』され続けている。こうした神話による『浄化』作用は、新しく登

場してくるアクターをも選別しているのである」(二二)。

筆者は、マレ地区の都市計画事業は「理想とされた姿と実態の乖離が(……)呼び込んだ」(二一九)ものだという。事業に際して、第二次大戦中のユダヤ人や戦後の低所得層の住民など、排除された人びとがいたが、このような排除のメカニズムについて、筆者は次のような指摘で本書を結んでいる。「歴史性を維持できなくする社会層に批判の矛先が向けられたことは重く見るべきである。歴史主義が政治と結びついたとき、攻撃され、排除されるのは、その社会層となる。歴史主義は、批判されやすい全面的な取り壊しとは異なり、目に見えない強制力となる可能性を秘めている」(二二一)。

以上、筆者の言葉にしたがいつつ、本書の内容をみてきた。

都市計画事業を長い時間のなかに位置づけた本書は、地理学の書であると同時に、都市史研究の書でもある。以下では後者の観点から本書の意義を検討してみたい。

フランスでは、都市史研究の進展がイギリスなどに比べて遅れ、本格化するの是一九七〇年代半ばのことであるが、現在でも二〇世紀については研究の余地が大きく残されている^①。また、都市のなかでは、首都バリは規模や重要性に比して研究が少ない。これには規模の大きさも関係しているし、一八七一年のバリコミューンによる火災で膨大な量の公文書が失われたことも研究の障害になってきた。

しかし、本書の意義はこのような研究の相対的な不足を補うことにとどまらない。むしろ、都市の物理的な側面や都市空間のあり方と、都市社会や都市政治の双方を収めたその視野の広さをこ

そ、まず評価されるべきである。

歴史学が都市を扱う際、政治や社会の側面がおもな関心対象になり、都市それ自体は背景や「前置き」になってしまおうという陥穽がある。これは、今日的な意味での政治や社会が形成される近現代について、とくに顕著である。フランス近現代史においても、一九世紀前半の蜂起や革命のメカニズムを大都市住民の日常生活にまで分け入って明らかにした喜安朗氏の一連の研究が、いまでも高く評価されつづけているのは、氏がこの点での視野の広さを有している希有な都市史家だからでもある。

都市計画事業の立案から遂行までを追う本書は、じつにさまざまな人びとや事象を取り上げている。都市計画の理念と技術、建築家の思想、行政官、地域住民、知識人などの意図や主張、事業決定の過程、事業の受容などが、ひとつずつ丁寧に論じられている。参照した資料も、関連当局の公文書、統計、地図、書簡などから、新聞・雑誌、さらには文学作品や映画まで、多岐にわたる。本書はまた表象についての研究書でもある。マレ地区をめぐる神話は都市計画の各段階に影響を及ぼし、それに関わった人びとも神話に言及してきた。事業は行政や開発の論理で動いていただけでなく、強固な神話に囚われつつ進められていたかのようである。歴史学でも他の分野でも、「神話」や「記憶」など表象についての研究はここ二〇年ほど盛んであるが、一部には、もっぱら表象を分析し作り手と受け手の問題を捨象するむきもみられる。この点で本書は、社会集団と関連づけつつ、表象が形成される過程や受容される経路を丹念に追っている。ここでも筆者の視野の広さは保たれている。

もちろん、都市計画事業それ自体とは異なり、表象についての資料はなかば無限に存在し、それに比べれば本書が依拠した資料は限られているといえる。だが、本書の眼目は表象と実体の関連を明らかにするところにあり、資料の限定は本質的な問題にはならない。ただし、「神話」の働きによって街区が物理的にも社会的にも「浄化」され、新しい都市景観が作り出されていく（一五）などのように、神話そのものが浄化機能をもつかのような言い方には、注意が必要であらう。神話は一つの背景ではあっても、浄化や排除は人間の所為である。

本書の特徴であり、意義をなしているのは、排除の問題を追求する姿勢である。ある地区の性格が特定の神話に沿って変容するとき、それにより排除される人びとが出てくる。マレ地区の場合、大戦中のユダヤ人や戦後の低所得層がそうであったが、二〇世紀終わり、神話の拘束力が弱まって地区に新たなアクターが登場しても、そこに新たな排除の論理が働いていることが示される。排除された人びとへのまなざしは、本書の至る所で感じられる。副題にある「浄化と排除の論理」は誇張ではない。都市計画は、机上の案や無機的な事業として捉えられるのではなく、さまざまな立場で計画に関わった人びとの理念や考え、そして地区に住んだ多くの人びとの生活や思いまでも含めて、捉えられている。景観や遺産の保護を謳うことがどれほどイデオロギー性を帯び、社会にどのような帰結をもたらすのかを示した本書は、緻密なモノグラフを通じて「大きな問題」にアプローチできることを示した、瞠目すべき成果である。

ただし、浄化や排除の性質や機能は、より深く考察されるべき

だっただろう。

もとより都市社会は複雑である。本書が明らかにしたように、浄化や排除の過程は主体と客体を替えつつ随所にみられる。だが、ユダヤ系の人びとが第二次大戦中に受けた扱いと、近年、ホモセクシュアルのなかで非白人や女性を受けているかもしれない扱いとを、同じ流れのなかに位置づけることは、はたして妥当なのだろうか。浄化や排除のあり方も規模も、何よりその文脈も大きく異なるなか、この点を十分に検討しないまますべてを同じ語で指し示すと、本書の成果や知見とは離れたところで、平板な歴史像が形づくられてしまうおそれもある。もし、都市計画にはつねに浄化や排除があつたのだと単純に理解されてしまうと、浄化や排除のない都市計画などそもそも可能なのかという疑問を抱く向きもでてくるかもしれない。

このような誤解を避けるには、Ⅲの最後で取りあげられた新たな社会集団に働く排除の論理を詳しく検証する必要がある。本書の主題は二〇世紀のマレ地区における保全計画であり、現在進行中の変化は中心的な対象ではない。それを承知の上であえて指摘するのは、本書の現在の意義が大きいからにはかならない。

浄化について付言すれば、Ⅰの最後で検討されたユダヤ人追放と都市計画の転換の一致については、状況証拠を越えるものがないなか、それらがどのように「分かちがたく結びついていた」（九九）のかが、評者には読みとれなかった。本書のもつとも興味深い論点のひとつであり、また地理学に限らず広く関心を集める点だけに、さらに詳しい説明があつてもよかった。

最後に、浄化や排除という問題意識に関連して、その対極であ

る共生について述べておきたい。一般に、都市は共生の地でもある。評者はかつて拙稿で、近代のフランス都市は、恒常的に膨張する、流動性の高い社会ではあつたが、モザイク状でもなければ、紐帯のない匿名性の強い社会でもなかったことを示した。このような共生の側面は、集団よりも、集団とは異なった次元での人的結合に焦点を合わせることで浮かび上がってくるものである。「浄化と排除の論理」に注目する本書が集団の動きを追つたのは当然であるが、視座を変えれば、都市社会の別の側面が明らかにするはずである。

本書は、みずからの問題設定に対しては十分に答えを出している。多くの資料に依拠した分析は緻密であり、論証はおおむね説得力がある。そのようにして得られた知見を組み入れつつ、どのような都市社会像を描き出すのが、評者も含め、都市史研究に携わる一人一人に問われている。

① アニー・フルコー「フランス二〇世紀都市史——その成果と課題——」中野隆生編『都市空間の社会史——日本とフランス——』山川出版社、二〇〇四年、二一〇—二三四頁。

② 長井伸仁「貧しさのなかで生きること——近代フランス都市住民の日常性と共同性——」『歴史学研究』第八八六号 二〇一一年、五三—六三頁。

(A5判 八十二四六頁 二〇一一年二月)

明石書店 税別三八〇〇円

(上智大学文学部准教授)